ぼくとポーランドについて、など

工藤幸雄
Kudō Yukio

工藤幸雄
Kudō Yukio

ぼくとポーランドについて、など

江苏工业学院图书馆
藏书章

共同通信社

◉著者略歴

工藤幸雄（くどう・ゆきお）1925年大連生まれ。52年東京大学文学部卒、54～67年共同通信社勤務。67～74年ワルシャワ大学日本学科講師。75年帰国。多摩美術大学教授を経て、現在、翻訳家、エッセイスト。95年ポーランド文化功労コマンドルスキ勲章受章。主な著書に『ワルシャワの七年』『ワルシャワ物語』『乳牛に鞍』、主な訳書にミウォシュ『囚われの魂』、コンヴィツキ『ポーランド・コンプレックス』、カプシチンスキ『帝国』（以上共訳）、パヴィチ『ハザール辞典』、シンボルスカ『橋の上の人たち』など。近刊予定に『シュルツ全集』、ポトツキ『サラゴサ手稿』（全訳）。

ぼくとポーランドについて、など

発行日—1997年12月10日　第1刷発行
著　者—工藤幸雄　©Yukio Kudo, 1997, Printed in Japan
発行人—半田拓司
発行所—株式会社共同通信社(K.K. Kyodo News)
〒107 東京都港区赤坂1-9-20 第16興和ビル
電話・営業部(03)5572-6021 編集部(03)5572-6016 郵便振替 00160-7-671
印刷所—信毎書籍印刷株式会社
乱丁・落丁本は郵送料小社負担でお取り替えいたします。
ISBN4-7641-0393-1 C0095　※定価はカバーに表示してあります。
本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。

¥2000

●目次

ぼくとポーランドについて、など　7

I

ぼくの貧乏物語　15
わたしの死生観　19
骨を折った話　23
満洲の記憶　29
迷い道の勧め　33
船の旅　36
戦後五十年とぼく　39
日本の大学はなぜだめなのか　44
絵図に見る江戸東京　48

難民について

II

百万人の学習者
すべからく
消えた「ツキサップ」
「おんしょうちょうご」とは
先生いじめの薦め
わらべうた
決まり文句
言葉の幽霊たち
活動大写真「イントレランス」
旅先で遇った人
いろはガルタ
とつくにびとと日本語

125 120 115 109 104 99 94 89 84 79 74 69

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

外国語習得術 134
流行を穿鑿すれば 130

Ⅲ

旧友と会う 143
ワルシャワ交友録 149
ポーランド人とお酒 162
原口統三とランボー 167
寺山修司との縁 170
小川徹 174
井上光晴 177
木村浩との思い出 180

IV

長い長い記録映画の話 187
ニューヨーク・ワルシャワ紀行 194
コンヴィッキについて 200
コンヴィッキ・インタビュー 203
警察・検閲・バルザック 229
「幸せの歌」――金日成のためのパレード 239
ワルシャワこのごろ 244
畸人ヴィトカッィ今昔 248
シュルツのこと 255
シュルツのガラス版画について 260
あるポーランド詩人の変貌――ヴォロシルスキの戦後 275
シンボルスカについて――『橋の上の人たち』を中心に 286
あとがき 308

ぼくとポーランドについて、など

装幀　菊地信義
装画　野村俊夫

ぼくとポーランドについて、など

過去四十年、なぜかポーランドに拘(こだわ)ってきたことになる。そのつどの思いの積み重ねが本書となった。貧しい内容かもしれない。これまでの著書と訳書(註)に目を通してくだされば、多少は重みが加わるだろうが……。

書いてあるのはポーランドと限らない。そこで「など」と付け足してみた。ほかにも少しはありますよとの信号である。亡友への哀悼、日本語を巡る憂慮、ちょっぴりと映画評、ポーランドの作家・詩人についての論評またインタビューも交えてある。全体をまとめてそこから何を読み取ることができるだろうか、かなり心もとない。

日本は小国である、ポーランドもまた小国である。だが、ほんとうに小国だろうか。たとい小国だとしても、小国の地位に甘んじたくないというのが双方に共通する念願であると思われる。〈日本帝国〉を自負した軍事的大国は一九四五年に滅び去った。悲しくもあり、半面、喜びも大きかった。敗戦を知ったあの瞬間のことも、それに伴った苦労のことも、この著のあちこちに短いながら触れた。同じ年、ポーランドは〈戦勝国〉となったが、その国が負わされた戦後の運命

は、当分のあいだはむしろ〈敗戦国〉よりも悲惨であった。

灰燼のうえに再建されたワルシャワには間もなくスターリン通りが現れ、〈スターリン文化科学宮殿〉の名を誇る巨大で醜い高層ビルが現出した。スターリン通りが消されたのは一九五六年のことと思われる。ゲーペーウーあるいはカーゲーベーなるソ連秘密警察機構の創始者はポーランド人であった。その男、フェリックス・ジェルジュインスキの銅像がワルシャワで倒された一九八九年は、モスクワよりも先んじた。ポーランド全土に数えるほどしかなかったレーニン像もたちまちに消えたが、旧ソ連の各地にそれは今も聳え立つ。この違いは小回りの利く小国の強みだけでは済むまい。暗すぎる歴史のなかで、ポーランドにとって現在ほど明るい時代はない。その明朗な年月を獲得できたのが、小国ポーランドの人々の自らの力であると断言できるのは、さらに喜ばしい。

軍国日本を嫌った一日本人のぼくは、僥倖に恵まれて軍籍に就くことなく、従って殺人を強いられることも、戦死することも——ぼくの次兄のように——、スターリンの捕虜収容所へ送られることも——ぼくの長兄のように——なしに、やっと戦争を生き延びた。そして戦後十一年を経て、友人と初めて翻訳を手掛けたロシア語の長篇小説がポーランド人作家ヤシエンスキ（ヤセンスキイ）の遺作であった。彼はスターリンの圧制下に死んだユダヤ系詩人なのだ。大げさに言えば、これがぼくとポーランドの結びつきの始まりとなり、その長篇のエピグラフがいわば導きの星となった。その題辞は次の三行で結ばれる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

無関心な人々を恐れよ――かれらは殺しも裏切りもしない。
だがかれらの沈黙の同意があればこそ、
地上には裏切りと殺戮が存在するのだ。

若いぼくは、ソ連の体制に対しても同様の嫌悪や違和感を覚えた。思想統制、祖国礼讃、狂信の強制、そのための監視の厳しさ、人命軽視――等々、程度の差はあっても、国民総動員を目的とする抑圧の体制に変わりはない。中国に対する侵略戦争から始まって、アジアに〈八紘一宇〉の〈大御稜威〉を輝かせる〈大御心〉を戴き、勇猛邁進して奮戦力闘するあまり、〈枢軸国〉ナチス・ドイツのスターリングラード敗退を後目に〈大東亜戦争〉の〈聖戦〉へと突入する愚を敢えて冒し、四年後、軍国日本は破滅した（そこに至るまで、かっこ付きのこれらの呪文をなんど聞かされたろう！）――その軍国日本が最後に地上へ呼び込んだのは原子爆弾という核時代の幕開けであった。

ソ連軍は満洲・樺太（四五年）に続く、ハンガリー（五六年）、チェコスロバキア（六八年）侵攻の戦勝に酔い、思い上がった果てついにアフガニスタン戦争（七九～八九年）で自滅した。地上最初の〈社会主義〉と自讃した体制は結局、侵略国――なかんづくヒトラー・ドイツ――と大同小異の〈国家社会主義〉でしかなかった。われわれは〈大日本帝国〉とソ連およびソ連圏の〈共

産主義体制〉とふたつの崩壊に際遇した。ナチズム、ファシズムの独、伊を含めれば崩壊はまだ増す。

アジアにおいては……とこの先を続ければ、話はますます暗くなる恐れがあるのでやめる。だが、北朝鮮や中国に見るように、その暗さの背後には侵略の魔手を拡げた軍国日本の亡霊がいつも立ちはだかっている。

大衆動員・民衆操作はつねに欺瞞を手の内とする。嘘を言い続け、お終いにはそれを信じ込ませるのがゲッベルス宣伝相と限らず支配者の策謀である。藁にも縋りたい弱い人々はこうして次第に体制の前に屈する。軍国日本、恐怖政治のソ連、またヒトラー体制・ドイツ――いずれを問わず、懐疑を抱くことさえ犯罪であった体制のなかで、たとい疑いながらも、国民の多くが欺瞞の網に早晩からめ取られて行った。前途のヤセンスキイも無数にいるその犠牲者のひとりだった。(同じ手法がいまもなおその他の国や地域で行われていることを恐れる)

欺瞞と立ち向かうのは困難を極めた。反抗者の敗北は目に見えていた。例外的な少数者が辛うじて抵抗に成功した。反逆の文学、抵抗の藝術がその中心にあった。だが、欺瞞の体制を支持し、鼓舞する側にも、またそれなりに別の文学があり、藝術があった。狂いのない正義心、誠実さ、悪に対する憎しみ、すなわち良心だけが作家の帰趨を分け、また彼らの歩みが時に生死、あるいは亡命か収容所行きかを分けた。

悪気流の対流する世紀に長く暮らしすぎたわれわれは、こんなにも単純な公式を見つけるまで

に、ほとんど一生を費やさざるを得なかった。ささやかなこの書物は、そういう不幸な世代からの遺書にも似た呟きとも読めよう。そこにはある程度まで暗黒の取り払われた世界に向ける用心深い安堵と微かな希望との青色の空が見えもするだろう。

単なるエッセイ集にしては、重すぎるまえがきとなった。政治学、社会学、経済学、国際関係論、まして言語学、哲学、数学、天文学――すべて学問とか科学とか名の付くものから逃げ回ってきた浅学菲才なぼくの雑文を、いかに積もうとも重厚な本となるはずもない。この著作は小国ポーランドを通して、文学と呼ばれるものの周辺を一貫してうろうろしてきた、小国日本の一市民の感想録（メモワール）以上の何ものでもない。謙遜を抜きにして言うが、説教も教育も指導もぼくの柄ではない。それでも、気軽に拾い読みしてくだされば、どこかに納得の行くような中身が見つからないでもなかろう。

『ぼくとポーランドについて、など』という妙に凝った標題は、大学で教わった渡辺一夫教授（一九〇一～七五）の模倣である。種を明かせば、教授の愛弟子、清水徹さんからことしの春、教授退任の記念論文を寄贈いただき、そこに用いられた渡辺先生譲りの論文の題名が気に入って、孫引き式に借用したまでである。ぼくが使うと、思わせぶりに響き、気恥ずかしい。恩師の講義を聴いたことは聴いたが、著作にはほとんど触れることなく、先生の口まねに「寛容」をたたえ、「不寛容」をなじるばかりの不出来な元学生のいたずら心に発する命名と見捨てていただきたい。師の葬儀は、ぼくが七年間のポーランド滞在を終えて帰国して二カ月後のことであった。気が付

けば、ぼくもそろそろ渡辺さんご逝去の年齢に近い。

工藤幸雄

（註）ポーランド関係の著作には『ワルシャワの七年』（新潮選書、絶版）、『ワルシャワ物語』（NHKブックス、入手難）、『ポーランドの道』（サイマル出版、筑紫哲也共著）、『ぼくのポーランド文学』（現代企画室）、『乳牛に鞍』（共同通信社）。それ以外では『絵の散歩道』（阿部出版）。

ポーランド関係の訳書の主なものにヤセンスキイ『無関心な人々の共謀』（育木書店、河出書房再版、江川卓共訳）、フワスコ『雲の中の第一歩』（角川書店）、ゴンブローヴィチ『コスモス』（恒文社）、同『ポルノグラフィア』（河出書房）、同『バカカイ』（同、近刊）、ノヴァコフスキ『ワルシャワ冬の日々』（直訳「戒厳令の報告書」、晶文社）、フェドローヴィチ『共産国で楽しく暮らす方法』（新潮選書、絶版）、コンヴィツキ『ポーランド・コンプレックス』（中央公論社、共訳）、カプシチンスキ『帝国』（新潮社、共訳）、ミウォシュ『囚われの魂』（共同通信社、共訳）、シンボルスカ詩集『橋の上の人たち』（書肆山田）、『ブルーノ・シュルツ全集』（新潮社、近刊）、ポトツキ『サラゴサ手稿』（東京創元社、近刊）。そのほかミッチェナー『ポーランド』（文藝春秋）、I・B・シンガーの児童書四冊（岩波書店）、また『ワイダは語る』（平凡社、近刊、共訳）がある。

ロシア作家からの訳書ではパステルナーク『自伝的エッセイ』（光文社）、エフトゥシェンコ『早すぎる自叙伝』（新潮社）、ドンブロフスキイ『古代保存官』（勁草書房）など。

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com